

# 心を遠い場所へ



小川洋子 (作家)

1962年岡山市生まれ。早稲田大学第一文学部文芸科卒業。1988年『揚羽蝶が壊れる時』で海燕新人文学賞、1991年『妊娠カレンダー』で芥川賞、2004年『博士の愛した数式』で読売文学賞、本屋大賞、『ブラフマンの埋葬』で泉鏡花文学賞、2006年『ミーナの行進』で谷崎潤一郎賞、2012年『ことり』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。ほかに多くの小説やエッセイを発表している。

Yoko OGAWA

ある日少年は峠の向こうの不思議な小山に行き着く。友だち大勢と一緒にわいわいするより、たった一人で静けさを味わいたい、と思わせてくれる小山だ。やがて彼はそこを領地とする小さな小さな人々、“こぼしさま”を発見する。

日本初の本格的ファンタジー作品とされる、佐藤さとるさんの『だれも知らない小さな国』は、両者のこの出会いからスタートする。こぼしさまたちは、小山の地面の下に町を作り、腐った木から発せられる青いリンの光を頼りに暮らしている。

しかし彼らはすぐさま打ち解けたのではない。最初は手探りである。こぼしさまは目にも留まらぬ素早さで動くために、なかなか正体がはっきりしない。そのうえ喋るスピードも桁違いで、少年の耳にはただ、「ルルルッ」と言っているようにしか聞こえない。そこに、ゆっくり話す訓練を受けた通訳が登場し、彼らの関係は一気に近づく。こぼしさまたちの小さな世界に触れながら、少年は自分の外側にある広い世界へ、たくましく踏み出してゆく。

この物語の出発点が、小山の静けさにあったのは興味深い。そこで少年は生まれて初めて孤独の心地よさを知り、自身の感覚の深いところまでゆっくりと降りていった。日常のざわめきから遠く離れた、純粋な感覚に従ったからこそ、こぼしさまを異物として遠ざけるのではなく、ともに成長してゆける仲間として受け止めることができた。

現実社会で行き詰まった時、しばしば救いとなってくれるのは、こぼしさまのような存在である。あらゆる面で自分とは全く異なる何かでありながら、確かな存在感を持ち、こちらの予想を超えた世界を編み出しているもの。

例えば最近、霊長類学者の山極寿一先生と対談してから、ゴリラに思いを馳せることが多くなった。強風や雪で新幹線が不通になり、予定が狂って苛立った乗客が、駅員さんに詰め寄っている。そんな時私は思う。「熱帯雨林のゴリラを見なさい。昨日、美味しそうな果実がたくさん生<sup>な</sup>っていた木に、今日何も実っていないからと言って、怒るゴリラはいません。何一つ自分の思い通りにならない世界で、彼らはお利口に生きているのです」

だから私は、小説の執筆が計画通りに進まなくても、ゴリラを見習って決してイライラしないように努めている。

夜、眠れない時もまた彼らのことを思う。遠いジャングルの奥、木の上にしらえた寝床の中で、母の温もりとボスの力強さに守られ、寝息を立てている赤ちゃんの姿を想像する。あるいは地面の下、朽ちた木が放つ光の中、宝石を転がすように「ルルルッ」と合図を交わし合う小人たちの声に耳を澄ます。

すると自分を取り囲む輪郭が悠然と引き伸ばされ、深く息を吸い込めるような気がしてくる。心を遠い場所へ運ぶと、そこには必ず安らかな眠りが待っている。